

堀田善衛 若き日の 詩人たちの肖像

上



集英社文庫

 集英社文庫

わか ひ しじん しょうぞう
若き日の詩人たちの肖像 (上)

1977年10月30日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

1991年6月20日 第5刷

著者 堀 田 善 衛

発行者 若 菜 正

発行所 株式会社 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (製作)

印刷 大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© Y. Hotta 1977

Printed in Japan

ISBN4-08-750061-6 C0193

集英社文庫

若き日の詩人たちの肖像
(上)

堀 田 善 衛



集英社版

目次

扼殺者の序章 六

第一部 10

第二部 一三

若き日の詩人たちの肖像
(上)

扼殺者の序章

少年——たしかに僕は故郷を出る道筋にいた

そこで記憶が中断する

火田民が襲って来て

そのどさくさに

機を見て僕はお前を扼殺したらしい

この詩が書かれたのは一九四七年の二月か三月のことであつたろう。「瀉の風景」と題されたものの一部である。男はその直前、一九四七年の一月に引揚船で上海から帰って来たばかりであつた。

「僕は故郷を出る道筋にいた」というのは——自分でも可笑しくなつて来るのを我慢しているの

Dis, qu'as-tu fait, toi que voilà,

De ta jeunesse ?

語れや君、若き日に何をかなせしや？

——ヴェルレーヌ——

だが、要するに書かれた詩の中身を説明するなどということは莫^ば迦^かげたことだ。がしかし、ここでその説明にしばらくこだわりたいと思う。

“故郷を出る”とは、人を喰^くったり喰^くわれたりして暮さねばならず、そうすることのほかに生きる方途を許されていないのだということの自覚と、その表明であつたかもしれない。そうして“火田民が襲^襲つて来て、そこで記憶が中断する”——火田民とは、それはここでもまた、要するに、というほどのことだが、戦争及び戦争直後ということであつたろう。“そのどさくさに機を見て僕はお前を扼殺^{えつせつ}したらしい”——お前、というのは、甘やかな少年期というものであつたであらう。

記憶の中断、欠落は、言うまでもなく火田民のせいだけではない。そのどさくさのなかに、自ら進んで、その青春時の、それこそ穴があつたら入りたいほどの恥ずかしい事柄や事件を、自分に強いて渴^{かつ}の岸辺の砂地に穴を掘り埋葬^{まいざう}をしてしまったということもある筈である。またさらに戦時と戦後の、事故と陷^{おと}穽^{せい}にみちみちた時の間に、男がのこして来た筈の書きものなどの非常に多くのものが失われてしまい、また彼らの若かつた詩人たちの仕事や記憶もまた時間のなかに、ひとしく失われてしまったものが多いということも含まれていよう。

扼殺^{えつせつ}し、扼殺されたものは少年期というもののだけではない。男はいまこれを書きながら、自分の手に、指と手のひらに明らかに、ある不気味な感覚を感じている。あるやわらかな、たとえば少女、あるいは女の首を絞めて扼殺^{えつせつ}したという、なま温かくいくらかのしめりをおびて、しかもやわらかい皮膚とその下の薄い肉、そうしてそのまた下にある、いくらかはどつどつする、たとえば咽喉^{どど}仏^{ぶつ}をばりばりと親指と手のひらの力でうち砕き、次第に指に力をこめて行つて指が

ぐいぐいと肉に食い込んで行き息のねをとめさせ、ついに扼殺のことをしとげたという、指と手のひらにねばりついてはなれぬ感覚が、確実にあることをみとめる。扼殺者の指とその爪の食い込む手のひらが、いま、万年筆をはさみもってこれらのことばをしるしているとあきらかに男は感じているのである。

自身の指と手のひらに、扼殺者としてのうずくような感覚が、真実にうずうずとうずいてこびりつき、離れようとしれないのである。それは、戦争がおわってからの二十数年、あるいは白紙にことばをしるすことを性としてからの三十年をへても、いまになお指と手のひらの皮膚になまなましく生きてのこっている。男がしめ殺したものが何と何と何であつたか。

「一九四三年

強烈な太陽と火の堇すみれの戦線で

おれはなんの理由もなく倒れた

おれの幻影はまだ生きている」

「おれはまだ生きている

死んだのはおれの経験なのだ」

「おれの部屋は閉されている

しかしおれの記憶の椅子と

おれの幻影の窓を

あなたは否定できやしない」

われわれはこの地上をわれわれの爪で引ッかく

星の光のような汗を額にうかべながら

われわれはわれわれの死んだ経験を埋葬する

われわれはわれわれの負傷した幻影の蘇生を夢みる

右の詩は田村隆一の「一九四〇年代夏」と題されたものの一部であるが、戦時の、赤い色をした死への招待状が、おそらくは何十万台の番号をつけてあらわれるのを待っていた、そうして実際に戦場へまどめてつき出されて、敗戦が来て、死の季節の、黒枠でかこまれていた男が、この詩に刻み込まれているように倒れた男としてその季節をとって生きのこってみると、やれやれ一安心などということではまったくなくて、自らに殺人者を見出さなければならなかったという次第であつたろう。負傷した幻影がふたたび蘇生するかどうかは、はなはだあやういものであるう。

死んだ経験を埋葬しなければならぬ、その当の男が死にかけていて、その死にかけている男が自らに殺人者、扼殺者であるという自覚をもっていたりしたら、負傷した幻影がたとえ蘇生したとしても、生きのびて行く機会は、これもまたはなはだあやういものであろう……。

第一部

驚くべき夜であつた。親愛なる読者よ、それはわれわれが若いときにのみ在り得るやうな夜であつた。空は一面星に飾られ非常に輝かしかつたので、それを見ると、こんな空の下に種々の不機嫌な、片意地な人間が果して生存し得られるものだらうかと、思はず自問せざるをえなかつたほどである。これもしかし、やはり若々しい質問である。親愛なる読者よ、甚だ若々しいものだが、読者の魂へ、神がより一層しばしばこれを御送り下さるやうに……。

——ドストエフスキー 米川正夫訳——

第一章

中学生としての男は、文学少年といつたものではなかつた。むしろ音楽少年といつたものであつたかもしれない。北陸の、古い町である金沢で男は中学生の頃をすごした。そうして一九三六年（昭和十一年）の二月二十五日の朝、東京のK大学予科の試験をうけるために上京し、上野駅についた。試験はいうまでもなく三月半ば頃に行われるものであつたが、それよりもずっと早く

上京をしてしまったのは、この日、二月二十五日の夜に、九段の軍人会館で、交響楽団の演奏会が、その頃にドイツから帰って来たある新進指揮者のタクトによって行われることを田舎の音楽少年が知っていたからである。少年は靖国神社裏の富士見町にあったじきの兄の下宿に落着いた。その夜の演奏会のプログラムには、ラヴェルのボレロとベートーヴェンの第五交響楽が入っていた。ラヴェルのきらびやかな舞曲であるボレロと、ベートーヴェンの運命交響楽というとりあわせは、どう考えても一晩きりの演奏会としては妙なものである、というほどの判断がつく程度の音楽少年で、この少年はありえた。だからこの指揮者は、自分が指揮しうるもの、こなせるものの範囲の広さを、この性質のまったく異なった二曲をプログラムに入れることによって示そうとしたのであろう、と少年は考えていた。

少年は、それまでに生の交響楽団の演奏を聴いたことがなかった。だから、ボレロの、あの異様なまでに単調な、同一のメロディとリズムを、異様なまでに何度も何度もくりかえしまきかえし、そのくりかえし毎にオーケストラというものの機能と能力のぜんぶを、あくまで、しつこいほどにも華麗に展開して行く演奏を聴いているうちに、ついにその音楽のなかへ、生理的なまでに、からだごとまるまるまきこまれて、とうとう異様な経験をしてしまったものである。

演奏がはじまってすぐに、少年はもうからだの具合がどうも妙だな、と感じていたのである。からだ揺れる、というのではなしに、肉体の動きを統御してくれる筈の、脳髓のどこかの部分が、単調なメロディがくりかえされるにつれて次第に痺れて来るかに感じられ、その痺れが次第に大きくなって来る音の波にのせられて揺れはじめ、音楽が最終的に痙攣^{けいれん}をはじめて爆発的なまでの巨大な音の波を崩して向う側につきぬけて行ってしまう、そこに盛大な拍手につつまれた無

力な静寂が訪れたとき、少年は下腹部に冷たいものを感じたのであった。

そのときの愕きと歓びは、少年を長く支配するにいたったものであった。中学を出たばかりの、受験生の自分が、一つの音楽に、かくまでに、性的なまでに攪乱されえたということ、芸術によって肉体の全体を占領され得る、自分がその容器たりうるという事実が与えた自信は、少年にとってかけがえのない経験であり、またそのことの裏側にあったもの、つまりは運ばれやすい性質であるということには気がついていなかったものであった。

軍人会館は、靖国神社のすぐそばであり、降り出して来た雪を踏んで少年は富士見町の下宿へ帰った。夜おそくまで、少年は昂奮して眠れなかった。ラヴェルのボレロは、音楽としてはそれほどのもではないにしても、とにかくスペインの舞曲にもとづいたものであり、華麗な音響配置の下に、言うとすれば、ある種の、動物的なまでに陰気なスペインの憂鬱をよどませているものであることを、現在の男は知っている。また、腰の細いスペイン男を主とするスペイン舞踊というものが、本当に動物的なまでに性的なものであることを承知している。スペイン舞踊のうちの、女の踊り子の役割は、あれは外国人にもやって出来ないものではないが、男の踊り手の野卑さ加減と繊細な洗練とが細い腰と腕によって、あたりにねばりつくばかりに発散されるエロティシズム、陰鬱に陰にこもったようなあのエロティシズムは、スペインの男たちだけにしか表現出来ないものであろう。闘牛もまたスペインでそれを見ていれば、そこにエロティシズムの占める部分がきわめて大きいことが自然に納得されて来る筈なのである。それは勇壮とか闘士と野獣といった要素からはきわめて遠いものである。むしろ、美女と野獣といった方が近いくらいのものであり、観客たちがくりかえしまきかえし、波のようにあがる歓声もまた、たとえばボレロなど

という音楽を自然に思い出させるものである。殺されて土に横たわり、駄馬にひかれて行く牛の屍は、あれは射精の後の、もはや役に立たなくなったペニスであり、剣をふりあげて勝利を誇っている鬪牛士は、あれはあれで勃起したペニスを自然に連想させるものである。

そういうことを現在の男は知っている。けれども、受験生は熱い頭をかかえて眠りをなさなかった。少年は別の大学の学部一年生になっていた兄が、上京初夜を迎えた弟を放ったらかしてどこへ行ってしまったものか、眠りをなさぬままに、二つならべて少年がしいた布団のなかで兄の帰りを待っていた。兄が、かなりに無頼な学生であることは、少年はとうに知っていた。前年の秋、スキーの選手であった兄はヨーロッパでの冬期オリンピックの選手に選ばれ、出発直前に肋膜炎を病んで渡航が出来なくなった。彼は泣いて口惜しがったものであった。スキーの選手であると同時に、玉ツキは七〇〇台をついてプロ級であり、麻雀は四段とかいう、普通の意味では途方もない学生であった。スポーツや遊びごとには、天才的とも言いたくなるほどの才能を発揮したことも少年は知っていた。窓枠にたまる雪を見上げながら少年はその兄の帰宅を待っていた。しかし兄は帰らなかった。

兄は帰らなかったのではなくて、友人宅へ麻雀をしに行つて、すでに二月二十六日の午前に入つていて、実は帰れなかったのであった。

後日二・二六事件と呼ばれる、軍隊の叛乱が起つていたのである。しかしこの雪の日に、下宿にとじこもつて受験勉強をしていた少年は、夕方近くまで何事も知らなかった。国家というものには、それが国家である以上は、内乱がつきものであるということについても、少年は何事も知らなかった。それはいかなる国の歴史にもあつたし、これからも屢々あるものの筈であるという

ことも知らなかった。そうして国家は、そのときの時限においてその成り立ち方をくつがえそうとする者に、死を課するものであるということも本当には知らなかった。町には物音はなく、雪のなかでひっそりとしていた。雪のなかでの、鼓膜を押して来る静けさには、少年は幼い頃からなじんでいた。そういう静かな、充実した時間のなかでの勉強はむしろ快いものであった。少年は国語の準備をしながら、こういうときにはブラームスかシューマンが向いている、と音楽のとばでこの内にこもった静かさを量^{はか}っていた。

兄の大学生は一日おいて二十七日の午後になつてから青白く緊張した顔つきで帰つて来た。肋膜を病んでスキーを廃してからは、この兄は顔から雪焼けを失っていた。兄が帰つて来ると同時に、小さな下宿屋は急にさわがしくなった。また近所からはまだ明るいのに雨戸をしめる音や釘をうつ音などさえが聞えはじめた。もはや勉強も、またブラームスやシューマンどころのさわぎではなかった。

「おい、あのな、避難命令が出たんだ。夕方までにな、布団と身のまわり品をもって市ヶ谷の小学校へ集合しろっていう命令が出たンヤ」

「へえ……。誰がそんなもんを？」

「そんなもんって、戒厳司令官だぞ。大変なんだぞ。お前なにも知らんのか？」

「知らんことはない。だけど新聞もラジオもありやせんから」

兄は大変、大変をくりかえした。彼は新聞などという無駄なものとはらず、ラジオがあった形跡はあったが、近所の質屋へあずけてあったものであつたらう。

「あのなア……」

と言つて兄は事件の概略を説明してくれたが、少年はほとんどなんの興味もたなかつた。

“大変”ということばについては、少年は曾祖母からすでにある種の心構えのようなものを教えられていた。北国の小さな港町に、二百年ほどのあいだ、北海道と大阪をむすぶ、いわゆる北前船の廻船問屋をいとなんで来た家の曾祖母は、米をめぐる民衆の騒乱のことを知悉していたものであった。廻船問屋は、廻漕問屋とも言つたが、それは米穀肥料の問屋をもかねていたから、米穀の類を買い叩き、これを倉庫に積んで値の上るのを待つ……。米騒動は、何も一九一八年（大正七年）の、少年の生れた年に、その生れの港の対岸にある滑川の女房連が発起して全国に及んだものに尽きるものではなかつた。一回きりのものではなかつた。明治以前にも、明治期にも、断続して米をめぐる暴動あるいは騒乱は、何度も何度もあつたものであつた。大正期のそれは、滑川からすぐに少年の生れの港に波及して来た。曾祖母は、直ちに家の者、店の者の先頭に立つてきばきと指示をし、家の者、店の者、召使たちなどのために別々にしつらえられていた巨大な風呂釜で粥をたくことを命じた。

「こんながにして、騒ぎのつづいたあいだじゅう、ずうと人民に粥をくばつて騒ぎをおさめたがや。滑川の者どもはダラやがいね。心得のないことをしてしもて」

と、少年がもの心ついたときに教え、問屋というものには問屋としての心得があることをさとしたことがあつた。そういう曾祖母の、漆塗りの古仏のような顔は、少年の心にある畏怖感を印したものであつた。ここで滑川の者ども、といわれる者は、言うまでもなく滑川の間屋衆ということであり、ダラとは莫迦の謂いである。明治の民権自由運動の壮士たちの後援者でもあつた老婆は、“人民”ということばを使ったものであつた。